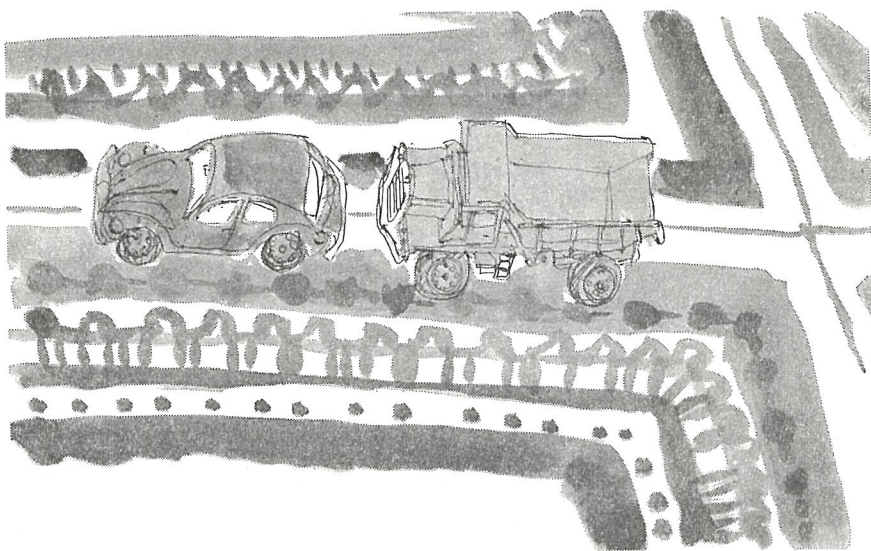




え と 文

.....
小 さ な 車

村上菜々子
.....

赤いワーゲン、白いベンツ、オーブンカー、黄色いジープ、それにかっこいいランポールギニーやロールスロイスがわが家には所せましと駐車している。まだまだそれだけじゃなくて、パトカーや救急車、赤いはしご付消防車、それにロンドン二階バス、ダンブカー、あぐくのはてにごみ集めの車までそろっている。

デパートの玩具売り場に行っても、町の小さな玩具屋さんに行ってもこの色とりどりのかわいいミニカーは、とても人気があるらしい。私のとこのこの小さな車の小さな持主は今、チョコレートよりもガムよりもこのミニカーに興味があるらしい。親子でミニカー売り場に行つて、子供はその中の一台に目を輝やかして「これがほしい」と言う。すると父親までが「こっちの方がいいヨ。いやあっちがいい」といっしょうけんめいだ。三十才ほども年が違ふのに結構張り合っている。

色といい、かたちといい、手で持った重量感といい、走りごちといい、私も何となくこの車たちが好きである。

この小さな車の出勤時間は朝九時頃、小さな持主が目覚ますと同時にである。入れてある籠を大きな金属のすれ合う音と共に一度にひっくり返して全車出勤である。それはフォードカプリも、タイヤの八つも付いたトラックも、一時である。それから夜の九時頃までたいていが十二時間勤務。食卓の上に家畜運搬車が止つたり、絨氈の文様にそつてバスが走つていたり、廊下の高速道路に何kmも長い列で停滞していたり、砂を満載したダンブカーが庭に横倒しになっていたりする。排気ガスも出さないし、危険もないし、なんと楽しい車だろう。

今は、籠の中に雑然と入っている。小さな運転手もさすがこれだけ多種多様の車を一人で運転した疲れが出たと見えねむってしまった。でも、こんどは夢の中で、赤や黄の車に乗つてあっちこち走り回っているだろう。

(女子中・高教諭、美術)

(三十一頁より)

垣で囲まれていた。石やコンクリートは植木を枯らすというので二重の竹垣は七年毎に取りかえられた。宮家の頃から出入りをしてきた植木屋のおやじはまだ大事そうに丁嚮をのせていた。父を見ると土下座をするだけでなく殿様というので父はひどくいやがった。裏手は鶯横丁という小路をへだてて子規庵があった。子規の死後もホトトギスの連中はよく訪ねて来たが、漱石や鷗外もまたよく姿を見せた。軍服姿でサーベルをガチャつかせ乍ら玄関に来て「御免!」といった鷗外の声はまだ耳に残っている。この間の晩、この庭の夢を見た。あるお茶の家の元物になっていふというのを頼んで見せてもらったが、すっかり当世風になっていた。目がさめて、あー、夢でよかったと思つたのである。

(女子大学教授・英語、英文学)